

機関（連携先機関）名	名古屋大学
拠点のプログラム名称	地球学から基礎・臨床環境学への展開
中核となる専攻等名	環境学研究科地球環境科学専攻
事業推進担当者	（拠点リーダー）安成 哲三 教授 外 22 名

〔拠点形成の目的〕

人間活動の影響による地球生命圏の変調を人体の病変に擬えるとき、環境学は病気に立ち向かう医学に相当する。しかし、これまでの環境学では、地球生命圏の仕組みやその人間社会との関係を解析する診断型分野（地球科学、生態学、地理学等）と環境問題の技術的・制度的対策を考案する治療型分野（工学・農学・社会科学等）が互いにほとんど独立に進められてきた。その結果、問題の現場において両分野が協力して診療に当たる、臨床医学に相当する体系的取り組みが欠如していた。そこで本拠点では、国内外の様々な地域で、人間と自然の関係の持続可能性を脅かす病気の診断から、その適切な予防と治療、治療の副作用の予測や防止に至る一連の実践的取り組みを、臨床環境学として体系化する。一方、臨床環境学を支える基盤として、地球生命圏における人間社会の持続可能性を蝕む病理を総合的に考察し、それに対する技術的・制度的アプローチの有効性・問題点を整理して、普遍的・地球的な視座を提供するために、基礎環境学を構築する。臨床環境学と基礎環境学は、環境問題に立ち向かう上での車の両輪であると同時に、双方が、既存の環境学の諸分野を統合していく要となる。

その結果、問題の現場において両

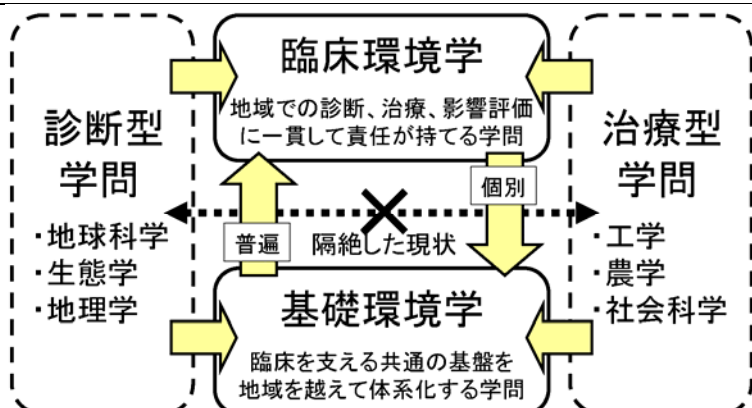
分野が協力して診療に当たる、臨床医学に相当する体系的取り組みが欠如していた。そこで本拠点では、国内外の様々な地域で、人間と自然の関係の持続可能性を脅かす病気の診断から、その適切な予防と治療、治療の副作用の予測や防止に至る一連の実践的取り組みを、臨床環境学として体系化する。一方、臨床環境学を支える基盤として、地球生命圏における人間社会の持続可能性を蝕む病理を総合的に考察し、それに対する技術的・制度的アプローチの有効性・問題点を整理して、普遍的・地球的な視座を提供するために、基礎環境学を構築する。臨床環境学と基礎環境学は、環境問題に立ち向かう上での車の両輪であると同時に、双方が、既存の環境学の諸分野を統合していく要となる。

臨床環境学の教育研究の確立のために、環境学研究科の持続性学プロジェクト、名古屋大学国際環境人材育成プログラム、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ等の実績を活かして、臨床環境学研修（On-site Research Training: ORT）を実施する。そこでは、対象地域を共有した多分野の教員・院生がチームを組み、地域住民や行政・NPO等とも協力して、現場での問題の特定、対策の立案、影響の予測等に取り組む教育研究連動型のプログラムを軸として、アカデミックな研究者にとどまらず、行政、国際機関、NPO、地域事業体などを担う人材の育成をめざす。

基礎環境学の教育研究の基盤としては、地球生命圏を全体的に理解することに取り組み、最高の事後評価を得た 21 世紀 COE「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」(SELIS-COE)の実績がある。これをもとに、地域間で共通の普遍性をもつ諸テーマに対応した、基礎環境学講究を開講する。その中では、工・農・社会科学分野のフィードバックを組み入れた、人間と自然の相互関係の仕組みについての体系的理解を進め、環境問題に関わる研究プロジェクトを先導できる研究者の育成をめざす。

〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕

- 1) 統合環境学特別コース：地域での実践力とグローバルな思考力を併せ持つ人材を育成するために、臨床環境学研修と基礎環境学講究の両者を必修とした、統合環境学特別コース（環境学研究科と生命農学研究科にまたがる）を設置し、実施経験に基づき、改良を進めている。
- 2) 臨床環境学研修：国内外の様々な地域を対象に、多分野の院生と教員がチームを組み、地域の自然と社会の持続可能性を脅かす問題を特定し、住民や行政とも連携して、解決策の探索やそれらの実施に伴う影響の予測を行う ORT を開始した。
- 3) 基礎環境学講究：地域を超えて、グローバルな共通性・普遍性をもつ課題を選定し、多分野の院生と教員がチームを作り、レビューと討論を通じて基礎環境学の体系を組み立てる試みを開始した。
- 4) 横断研究プログラム：統合環境学特別コースの実践などを通じて、分野横断研究を推進している。
- 5) 国際連携プラットフォームの構築と強化：国内及びアジア各国の大学・研究機関との協力ネットワークを強化し、ORT を国際展開し、また、国際的研究プログラムとの連携やリーダー的な海外研究者の招聘等を通じて、基礎・臨床環境学研究を推進している。
- 6) キャリアパス支援：アカデミックなポストだけではなく、ORT 等を生かした多様な進路の開拓に努めるべく、修了生による自立した経営体としてのコンサルティング・ファーム構想の検討を開始した。



(総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、グローバルCOEプログラムの推進が国際化の推進として、大学の重点政策と位置付けられており、グローバル高等教育研究機構が設置されている。また、教職員の採用や博士後期課程の大学院学生や留学生に対する支援など、積極的にプログラムを支えていると評価できる。

拠点形成全体については、教育、研究、フィールドワークなどが融合した国際的な連携プラットフォームや、On-site Research Training (ORT) について、高く評価できる。拠点運営会議や個々の事業推進担当者も充実しているように見受けられるが、臨床環境学の要となる診断と治療を統合するためには、更なる工夫が必要である。

人材育成面については、統合環境学特別コースの設置や、ORTにおける基礎環境学と臨床環境学の現場学習等、評価できる。日本、中国、ラオスをフィールドに新たな臨床環境学を展開し、大学院学生の課題発見やその解決への提言等、有効な成果をあげている。また、アジアでの環境問題に関する国際協力の豊富な実績に基づく臨床環境学の展開は意欲的であり、受賞等の成果は評価できるが、キャリアパスの開拓については、更なる努力が必要である。

研究活動面については、活発な研究活動が進められており、環境診断と治療を両輪とする臨床環境学という新たな領域の開拓が、今のところ順調に進められているが、学術領域として完成像の確立を図ることが望まれる。また、基礎環境学の更なる深化・体系化が望まれるとともに、文理融合、理工融合に向けた国際的な連携プラットフォームなどの取組みの発展が望まれる。

留意事項への対応については、基礎環境学と臨床環境学の統合について、新たに生み出された事例が示されているが、もう一步深化させた「学」としての成果が期待される。

今後の展望については、臨床環境学の関連分野の中で、既存の分野以外の融合分野が出てきており、臨床環境学という新分野の展開が期待される。